



クリスマスローズ

富坂だより



富坂子どもの家卒園式 2016年3月24日

「歴史」と「希望」

Hirabayashi Takahiro
● 平林 孝裕

「歴史」という言葉が、最近とても心にかかるようになりました。日本のみならず世界で日々起こる出来事、それには自然災害もふくまれますが、を直接・間接に経験する中で、「歴史」が刻まれていることを、ひしひしと感じるようになったということです。しかし、サルトルが引用して人口に膾炙した「眼は自分を自分で見ることができない」というオーギュスト・コントの言葉ではありませんが、私たち自身が歴史を構成するのですから、自身の歴史的歩みそのものを認識することはできないはずで

す。また、「歴史は繰り返す」という言葉が聞かれるようになりました。歴史とは、同一条件で再現・反復される自然との対比で、一回生起的な事柄を問題にするはずで。それが「繰り返す」とは何を意味するのでしょうか。良いことが起こっているとき、私たちはそれが「繰り返される」ことを意識しません。「繰り返される」のは私たちにとって不都合なことです。エドモンド・バークは「歴史を知らないものは、それを繰り返す運命となる〔または判決を受ける〕」と語りました。歴史は本来繰り返すことがない。にもかかわらず、歴史を知らぬ私たちは愚かにも同じ過ちを繰り返す。「歴史は繰り返す」は現状に対する諦観の表現ではなく、「歴史に学べ」との戒めと理解されるべきです。

私たちは過去の過ちに学び、認識こそできませんが、一次的に生起する歴史を構成する者として責任を果たし歴史を刻むことができます。本来「歴史は繰り返す」ことがない。ここに「希望」の根拠があります。悪しき歴史を繰り返すことがないよう希望をもちたいと思います。今こそ、私たちの歴史を検証し、新しい歴史を刻み続けるために希望を語る誠実な努力が求められています。富坂キリスト教センターの活動は、今日必要とされている努力に大きく資するものと考えます。センターが「希望の主」であるイエス・キリストに導かれつつ、今日的課題に応える活動をさらに展開できるよう願っています。

(ひらばやし たかひろ／センター運営委員・関西学院大学教員)

目次

巻頭言 (平林孝裕)	1
「脱原発社会・未来世代への責任」研究会報告 (内藤新吾)	2
「沖縄における性暴力と軍事主義」研究会報告 (山下明子)	3
「戦中・戦後の日本の教会 戦争協力と抵抗の内面史を探る」 (矢吹大吾)	4
—寮生から— いそろう (潘吉玲)	5
富坂に、新しく認可保育園が誕生します ～2017年4月開園予定～ (金子恒一)	6
富坂子どもの家 活動報告より	6
豊富な時間 諸宗教間対話プログラム報告 (リチャード・ジャミーソン)	7
富坂キリスト教センター 2015年度 事業報告/ 「紀要」6号発行のお知らせ	8
編集後記	8

第37号

37

June 2016

発行人 秋山 眞兄
 発行元 公益財団法人基督教イースト・エイジャ・ミッション
 富坂キリスト教センター
 2016.6.23.
 〒112-0002 東京都文京区小石川2-9-4
 TEL 03(3812)3852 FAX 03(3817)7255
 ●管理部門
 TEL 03(5800)4557 FAX 03(3811)2245
 URL <http://www.tomisaka.jp>

「脱原発社会・未来世代への責任」研究会報告

● 研究会座長 ^{Naitou} 内藤 ^{Shingo} 新吾

当研究会は、今年2月の会合をもって、予定された務めを終了し、解散いたしました。といっても、あと少しだけ、各研究員の発題を一冊の本にまとめるための、各担当者の清書作業が残っていますが、それもほぼ完了の段階にあります。

三年間にわたりこの研究会を続けることができ、たくさんの貴重な学びを共にして無事感謝のうちに終わることができたことは、企画をくださった富坂キリスト教センターの理事会の方々の時代を見る目の確かさと、センターの働きを支えてくださっている皆さんのお力添えによるものであったことを、心より感謝いたします。また、当研究会のメンバーのお一人お一人にも、本当にお忙しいなかを、準備に時間をかけてご発題くださり、各員の発題に対しても、毎回熱心に意見交換をくださったこと、本当に感謝でした。

各回の記録は、発題部分を本の中に収録し、意見交換の部分は、分量的に膨大であるためそれは割愛しますが、その代わりに、参加者全員での座談会をその本に収録いたします。研究会の最終回に全体を振り返って持ったものです。どうぞ楽しみにしててください。同書には、当会の開始時期に客員としてお招きした、福井県の若狭の海辺にある明通寺住職の中嶋哲演さんと、昨年天に召された関西学院大学の栗林輝夫さんの、貴重なご発題も共に収録されますので、本当に希少な1冊となると思います。出版を予定しています本の題名は、『原発と宗教～未来世代への責任』で、某キリスト教の出版社より7月末頃に出る見通しです。これは、以前にも富坂キリスト教センターが、チェルノブイリ原発事故を受けて、今回と同じようなシンポジウムを開催し、1993年にそのまとめとして出版した『エコロジーとキリスト教』に並ぶものとなるでしょう。

そうした大切な取り組みに、ご一緒させていただけたことは、身にあまる光栄でしたが、最初に

座長の話に依頼されたときには、本当に当惑しました。各界で活躍されている専門の方々に前に、まとめ役などとてもできないことであり、せいぜいしもべのつもりでお受けしましたが、細かな配慮のいる作業はすべて、センターの岡田主事さんが負ってくださり、本当に助けられました。何もしていないのに、気持ちだけ労し、それでも何とか終わることができたことに、ホッとしています。

ところで、2月の最終回で持った座談会の前に、昨年11月に最後の発題を私が担当いたしました。それについても、少しだけ下に報告をさせていただきます。詳しくは、既に『紀要』の第6号に載っておりますので、それをご覧ください。

私が担当した回の題は、「宗教者として問う原発問題の深層」です。簡単に内容紹介しますと、「原発と原爆は違う」と国・電力会社に言われてきたことが、実は関係があることなので、それを気付かせないようにするため言われてきたことであり、原発は、アメリカを中心とする戦後間もない核保有国が、自国の経済を安定させて核兵器製造を継続できるようにすることを目的として売られるようになったものであり、それと同時に、買う側には核兵器を作らせないように監視も約束させたものだという事です。そして、世界で唯一、原爆を実践投下したアメリカにとっては特に、広島長崎への投下は正当なものであり、放射能の影響も後遺症を残すようなものではなく、原爆は決して悪魔の兵器ではないということであれば、戦後も原爆を製造し続けることはできず、また核施設で働く者たちの放射線影響の労災申請を募るためにも、原爆投下の被ばくの実相を隠してきた歴史だということです。同様の理由で、原発事故の可能性もすべて隠してきたのです。原発問題の無茶ぶりが許されている背景を知ることは、止めていくためにも必要なことと思います。

(ないとう しんご／日本福音ルーテル稔台教会牧師)

「沖縄における性暴力と軍事主義」研究会報告

● 研究会座長 Yamashita Akiko
山下 明子

私たちの研究会は4月から3年目に入りました。

2015年11月15～16日、センターで行われた第7回研究会では、鄭暎恵さんが「レイシズムとしてのセクシズム、セクシズムとしてのレイシズム～ジェンダー・セクシュアリティの視点から考える“ヘイトスピーチ”～」、秋林こずえさんが「SWAN (Service Women's Action Network) の活動と米国議会の状況」の発表をされました。

鄭さんは、現在のヘイトスピーチはレイシズムだけの問題ではなく、1945年来の東アジアでのアメリカ支配と安全保障戦略の反映であり、外国人だけでなく女性や若者など日本国民にも「植民地化される人々」化が進んでおり、洗脳されると自らが「差別する大衆」になり、全体主義化の危険があることを指摘されました。また、外部からくる権力や暴力に抗して男女間の序列が強化されるとセクシズムになり、マイノリティの女性はより性暴力を受けやすくなります。発表後に、沖縄の状況との類似性、女性兵士のレイプのことなどを話し合いました。

秋林さんの報告のSWAN(女性軍人アクション・ネットワーク)は、米軍内の性暴力の被害者/サバイバーや退役軍人が活動するネットワークです。全米軍に占める女性兵士の割合は2011年で推定約14%ですが、2013年度の報告書によれば、被害者数は5518人(うち兵士は4605人)で、訴え出ないケースも勘案すると、2万6千人の兵士が性暴力被害にあっていると見積もられています。現在、米国議会では女性議員がこれまで最多で、軍隊内の性暴力とトラウマの問題に取り組んでいる議員たちがいます。両性の平等から軍隊や戦闘への女性の参加を保障しなければならないが、性暴力がこれを損なっているという考え方からのことです。

発表後、米軍の“like to kill”訓練の男性性、敵は自分より弱い「女」だとミソジニーを煽ることが性暴力と関係しているなど、日本軍のケースとも比較して話し合いました。

15日夜の公開セミナーは、山城紀子さんが「沖縄社会を拓く～戦後70年、女たちの活動と歩み～」と題して、戦後の非常に困難な中で立ち上がった5人の女性について、ご自身の取材と出会いの体験から、熱く語られました。

第8回研究会は今年の2月14～16日に沖縄で行

いました。

山城紀子さんが「国際女性年以降の沖縄の女性たちの変化～『固定的役割分担』意識への疑問から『性暴力』の概念

に出会うまで～」、安次嶺美代子さんが「学校教育にみるジェンダーの問題」のテーマで発表されましたが、ここでは15、16日の宮古島でのフィールドワークの一部について報告します。

沖縄戦当時、宮古島には3万人の日本兵が駐屯していました。当時の宮古島の人口は6万5千人で、そのうち1万3千人が兵役、徴用、疎開などで不在だったので、島全体が要塞化していました。そこに17箇所の慰安所があったことが確認されています。

宮古島には川がなく、共同井戸を軍民共用で使っていたので、「慰安婦」が水浴びしたり、洗濯の仕事をしているのを住民が見たり、話を交わしています。また、朝鮮人「慰安婦」たちが軍の行事で踊り歌わされたアリランの歌を住民は覚えています。今回、私たちはその1つの野原(のぼる)の慰安所跡を訪ね、自分の土地に「アリランの碑・女たちの碑」を置かれた与那覇博敏さん(1933年生)の体験談を聴き、兵舎や慰安所跡を案内してもらいました。

次に、ハンセン病療養所の宮古南静園(1931年に「県立宮古保養院」として開所)を訪ね、退所者のお話を聞きました。戦時中、園が焼失して避難していた海辺の洞穴、餓死、マラリアなどで亡くなった100人以上の方の埋葬跡地、墮胎された子どもたちの供養塔や隔離を正当化するような貞明皇后の歌碑など、説明に胸が苦しくなりました。

宮古島はまた陸上自衛隊のミサイル部隊の配備予定地となっており、実弾射撃訓練場などの関連施設の他、南島諸島のミサイル部隊の地下司令部が置かれる計画とのこと。信じられない思いで見学しました。

(やました あきこ/富坂キリスト教センター運営委員)



アリランの碑

「戦中・戦後の日本の教会 戦争協力と抵抗の内面史を探る」 研究会報告

● 研究会主事 ^{Yabuki} 矢吹 ^{Daigo} 大吾

はじめに

去る3月11日(金)、2015年度第2回「戦中・戦後の日本の教会 戦争協力と抵抗の内面史を探る」研究会が開催され、高井ヘラー由紀氏と矢吹が、それぞれのテーマについて、問題意識と予備的研究として発表した。本稿ではその大要を紹介する。また、今後の研究会の予定について紹介したい。

尚、本研究会メンバーは以下の通りである(敬称略・順不同)。戒能信生(座長、日基教団千代田教会牧師)・李省展(恵泉女学園大学教員)・徐正敏(明治学院大学教員)・渡辺祐子(明治学院大学教員)・大久保正禎(日基教団王子教会牧師)・上中栄(日本ホーリネス教団鶴沼教会牧師)・高井ヘラー由紀(明治学院大学研究員)、矢吹大吾(日基教団四街道教会牧師)。

また、この研究会は、その研究成果を2019年に刊行する予定である。

発表—問題意識と予備的研究として

① 矢吹「戦時下を生き抜いた牧師—廣野捨二郎」

廣野捨二郎は、日本福音教会の牧師として、本所福音教会(後の日本基督教団本所緑星教会)における伝道に従事した。日本基督教団成立後、近くにあった旧ホーリネス教会が解散させられた際は、その信徒たちを受け入れた。一方で、その働きは教会だけにとどまらず、日本福音教会において、財務書記、財務局長、社団理事長、福音教会維持社団理事長(教団成立後は落合福音教会維持社団理事長)、福音教会東京地区部長、孤児収容社会事業「愛泉寮」理事長、東京聖經女学院教授(婦人伝道師養成機関)など、福音教会の中において中心的な働きを担った。また、日本基督教会や、日本メソヂスト教会、日本組合基督教会など、大教派がひしめく中、日本基督教団の合同準備委員会委員や第三部理事、常任常議員会書記など、主要な働きを果たしたが、1945年3月10日、東京大空襲により亡くなった。

廣野について「伝記」や「教会記念誌」(本所緑星教会)、「追想集」が纏められているものの、歴史研究の対象として扱われたものは皆無である。その理由として、空襲で資料となるものが焼失したことが挙げられるよう。一方で、「福音之使」

(旧日本福音教会機関紙)には、廣野が書いたものが収められており、それらを手掛かりに今後研究を進めたい。

② 高井ヘラー由紀「回想から見えてくる戦中の在台湾キリスト教徒」

先行研究と課題について。15年戦争期の台湾キリスト教を論じた主な先行研究として、『台湾基督教長老教会』が挙げられる。しかし、台湾教会関係者の戦争経験は個々の回想においては記憶されつつも、総合的には検討されてこなかった。よって、戦争「協力」「抵抗」の問題以前に、戦争中の記憶を掘り起こし、台湾教会の人々にとって戦争はどういうものだったのかを明らかにする作業が必要である。

資料の問題について。これまで発表者が使用してきた主な戦時期資料群として、次のものを挙げるができる。一次資料・教会定期刊行物(『台湾基督教会報』『台湾青年』『台湾基督教報』)、在台日本人関係・「信交会録音テープ」『台北日本基督教会の思い出Ⅰ・Ⅱ』。二次資料・『台湾基督教長老教会百年史』『南台教会史』『共に悩み共に喜ぶ』など。

今回、新たに検討予定の資料とその限界について。台湾人伝道者および信徒による回想録、自伝などを資料として用いるが、どこに焦点をあてるか(教会指導者か一般信徒か、台湾か日本内地か、日本人か台湾人か原住民か)検討を要する。

今後の研究会予定

今後の研究会日程・発表者・ゲストは以下の通りである。2016年度第1回 7月29日(金) ゲストスピーカーを招いて講演を聞く(山崎和明氏・吉駒明子氏)、2016年度第2回 11月(上中栄氏・渡辺祐子氏)、2016年度第3回(李省展氏・徐正敏氏)。

(やぶき だいご/教団四街道教会牧師)



廣野捨二郎 牧師

—— 寮生から —— いそろう

Pan jirin
● 潘吉玲

解題：「放浪記」など格好のよいタイトルを付けてみようと思ったのですが、どうしても思い浮かばず、開き直ったところ、「いそろう」になりました。

筆を取ると（本当はパソコンを開いてみると）、ふっと思いました、本当に長く「いそろう」したねと、実家の次、二番目に長く住んだのは、この国際学寮だと。

「無告の民」ではありませんが、モーセの導きもなく、転々として国境を越え、この異国の「山上」に住み付いてから「夜ザクラ」を見るのはもう何度目かな。

「夜ザクラ」見学は寮のプログラムの一つです。寮のプログラムには大体二種類があって、書き初め、生け花など、季節に合わせて、日本文化を味わうものと、原爆の話など国際交流と理解を促すものです。時間の経つことを忘れようとする「いそろう」は、後者のほうが好きです。こう思っているうち、小鳥の鳴き声も「いそろう」、「いそろう」のように聞こえてきました。寮の裏側は庭のようになっています。静かさにも、デメリットがあると、初めて思いました。

小鳥に腹たち、二階の共用キッチンに逃げ込みました。あいにく、そこにはパーティーの準備が始まっています。キッチンが広いので、寮生同志やまた外の人もしょに、時々パーティーをやっています。留学生史関係の研究をしていますが、神保町、小石川あたりは戦前でも留学生が多く住んでいたところでした。彼らの記録には、味噌汁、漬物を食べるのが苦痛だとよく書かれています。それを読む度に、妄想してしまうのです。彼等が、もしこの寮の各国の料理で埋められたパーティーの食卓を見るなら、どんな感想を抱くのだろうと。やはり、国際化が大きく進展したと。

キッチンで妄想を逞しているうちに、お前も参加するだろう、料理の手伝いをしろと声が掛けられました。急に思い出しました。そうだ。私はインスタントラーメンしか作れないなんだ。作れないものは作れないと、また開き直りでもするかと迷っているうちに、近所の知り合いから、すき焼



生け花プログラム 講師の小林泉華先生と。右から二人目が筆者。

きをいっぱい作ったから、食べに来ないかと電話がかかってきました。寮から飛び出しました。助かった。

寮のプログラムに近所の方が参加するなど、寮はまわりと交流があります。近所の猫ちゃんがいなくなった時、寮の掲示板に猫探しのポスターが貼られ、猫大捜査線の一環に組み込まれました。このようなこともあって、路上でご近所さんと合うとき、いつか挨拶するようになりました。挨拶したら、日本人の家に上がるチャンスはあまりないだろうとその家に招かれて、お茶をいただくようになりました。お茶を飲んだら、いつの間にか時々ご飯を食べに行くようになりました。ご飯を食べるお客、つまり「食客」、ますます「いそろう」になっています。

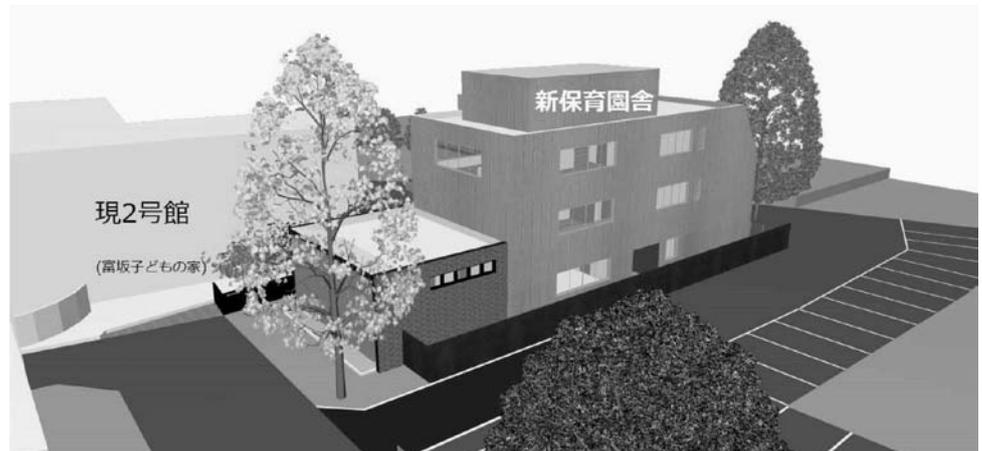
長く「いそろう」しているだけに感動したことももちろんあります。3.11大地震の時でした。安全な飲み水を調達したいという寮生の要望に答えて、事務室は一時水の代理販売店のようにになりました。近くの店で、ヘルメットが全部売り切れになったのですが、ネットで買えるところを調べていただきました。その時、寮の経営はただ仕事としてなされているわけではなく、寮には寮の精神というものがあるとしみじみ感じました。普段迷惑ばかりをかけていますが、自分にできることなら、協力したいと、「いそろう」は思いました。

(ばん じりん／寮生・早稲田大学博士課程・中国出身)

富坂に、新しく認可保育園が誕生します ～2017年4月開園予定～

● Kaneko 金子 Koichi 恒一

かつて戦前・戦中・そして戦後直後（その後移転・閉園）まで上富坂幼稚園のあった場所に、新しく認可保育園が誕生します。予定地は、これまで長らく駐車場事業用地として活用され、新しい利用方法についても理事会及び評議員会等で検討が進められてきた場所ですが、昨年度から行政機関（文京区及び東京都）との相談も重ね、急増する待機児童への対応というニーズに応えるべく、定員90名の認可保育園計画が承認されました。園舎が隣接することになる児童発達支援事業所「富坂子どもの家」（6年前設立）とも協力し合い、園



庭や園舎等で子ども達と一緒に遊び、一緒に成長できる場を作っていけるようにと皆一同で願っています（工事は6月から着工予定です）。

（かねこ こういち／事務局長）

富坂子どもの家 活動報告より

3月24日に第4回卒園式を、ご家族や在園のお友だち、先生方に祝福されながら行い、4名の子ども達が巣立ちました（本紙表紙ページ写真）。

そして4月の新学期からも合計30名が利用契約し、毎日元気に登園しています。天気の良い暖かい日には、近くを散歩し、お花見をしました。枝垂れ桜や、花びらが風で舞ったりする様子を楽しみました。新入園のお友だちも、しっかりと歩きました。

5月に入ると、幼児クラス（集団保育）と乳児対象の親子クラスが、それぞれ新緑の小石川植物園に遠足に行きました。親子クラスでは参加したほとんどのみなさんが、初めての遠足でした。ママ達と一緒に楽しいひとときを過ごしました。

（富坂子どもの家Facebookより抜粋・編集）



豊富な時間 諸宗教間対話プログラム報告

● リチャード・ジャミーソン

こんにちは。私の名前はリチャード・ジャミーソンで、英国人の父を持つドイツ出身の25歳です。ボフム大学（ドイツ）でプロテスタント神学を学び、NCCのISJPプログラムのため半年間日本に滞在しました。私たちは、京都での3か月の研修プログラムと並んで、8日間東京で過ごしました。富坂キリスト教センターが私たち5名の研修生とシャウベッカー先生（引率）を温かく迎え入れ、岡田夫妻の行き届いた世話により、東京で素晴らしい滞在の機会を得ました。この文京区は、東京を探索するには申し分のない町です。都心なのに、とても閑静なので長い一日の間、いろいろな体験をした後、本当にリラックスできる場所です。

東京でのプログラムは、私たちの京都での経験を完全なものにするものでした。京都では、日本の宗教の多様な側面について実に多彩な顔ぶれの教授陣から学びました。仏教、神道、多くの新興宗教の豊かな伝統があります。日本のキリスト教はたしかに少数ですが、人道的支援などにおいて大きな役割をもっています。私が興味深く思うことは、多くの日本人は自分たちのことを信心深くないといいますが、それにもかかわらず新年には神社を訪ね、亡くなる際には僧侶による仏式の葬儀が営まれます。

私がグループと一緒にこれらの多様な印象を京都で集中的に受けた後の東京の日々は「スイッチを切る」のにぴったりとした時間でした。宗教の役割は京都のように大きくはありませんが、東京はむしろ風が一日中激しく吹くところです。

私たちは、非常に刺激的な一週間のプログラム表を受け取りました。東京での旅は、富坂キリスト教センターの素晴らしいクリスマス会で始まりました。美しい讃美歌を歌い、様々な国籍の人と夕食を共にし、プレゼントを交換しました。会のあと、引き続き学寮の共用台所に移動し、山上国際学寮の素敵な寮生たちと語り合いました。

翌朝、岡田牧師の案内で、浄土宗のお寺へでかけました。それは私たちが今まで見てきたお寺とは一風変わった寺院でした。大河内住職は、環境にやさしい省エネ型ライフスタイルを重視しており、その講演の中で、日本の省エネに関してはまだ開発の可能性が多くあると語りました。この住職は、自分の手で持続可能で環境に負荷のかからない寺を改築したのです。

三日目に、私たちは「女たちの戦争と平和資料館」に行きました。ここは、第二次世界大戦下の旧日本軍の戦争犯罪に取り組んでいます。アジア



浄土宗見樹院にて 右端が大河内秀人住職、左から二人目が筆者

全域の、罪なき女性たちがどれほど多くの被害を受けたかを衝撃をもって拝見しました。この資料館と対照的なのが、辻子実さんと訪問した靖国神社と遊就館です。これらは戦争を美化するもので、非常にわずかな批判がそこに記載されていただけでした。戦争で亡くなった兵士たちを憶えることは大切ですが、忘れてならないのは、多くの人々が戦場に行くのを自分で自由に決められなかったこと、結果的に、靖国神社に示されているように「お国のために死にたい」とは思わなかったであろうことです。

その翌日に私たちは、日蓮の仏教にそのルーツを持つ宗教運動・立正佼成会の信者と興味深い出会いをしました。そこでの親切な歓迎の挨拶は私たちに驚かせました。完璧な英語と興味深い方法により、その歴史や教義の詳細な説明を受け、博物館に案内してもらいました。

東京滞在の最後の日には素晴らしい天候のもと、鎌倉に出かけました。駅で荒井仁牧師の挨拶を受け、大変興味深いこの町を一日中案内してもらいました。特に印象に残っているのは、巨大な観音像があり、美しい海を一望できる長谷寺です。海辺の散歩は、私の日本滞在中でも最高の瞬間の一つでした。サーファーやウミガメ、美しい夕焼けがいまも目に焼き付いています。夜には荒井先生ご夫妻が夕食にご招待下さり、素敵な別れの夕べ（ISJP最後の夜）となり、食卓を囲みつつ、プログラムの全体を振り返りました。

富坂キリスト教センター、岡田夫妻の温かいもてなしに心から感謝します。じつに快適で広々とした部屋に滞在することができ、センター・山上学寮にはいつも愉快的話し相手がいまいました。東京での素晴らしい時を感謝しています！

(りチャー・ド・ジャミーソン/EMS研修生/ドイツ語訳:岡田仁)

富坂キリスト教センター 2015年度 事業報告

I、出版物

- ①『富坂だより』35号を6月に、同誌36号を12月に刊行。
- ②『富坂キリスト教センター紀要』6号を2016年3月刊行。

II、研究会

- ①「日韓キリスト教史資料集第Ⅲ編」研究会（2007年～）
東京・京都の部会・新教出版社・センターで編纂作業を継続中。
- ②「脱原発社会と未来世代への責任」研究会（2013年～）
2015年4月 第9回研究会（研究発表：安田治夫さん）
2015年6月 第10回研究会（研究発表：河合弘之さん）
2015年11月 第11回研究会（研究発表：内藤新吾さん）
2016年2月 第12回研究会（座談会）
- ③「沖縄における性暴力と軍事主義」研究会（2014年～）
2015年5月 第5回研究会（研究発表：川田文子さん、大嶋果織さん、山下明子さん）
2015年8月 第6回研究会（研究発表：宮城晴美さん、高里鈴代さん。沖縄現地研修）
2015年11月 第7回研究会（研究発表：鄭暎恵さん、秋林こずえさん）
2016年2月 第8回研究会（研究発表：安次嶺美代子さん、山城紀子さん。現地研修）
- ④「戦中・戦後の日本の教会 戦争協力と抵抗の内面史を探る」研究会（2015年～）
2015年10月 第1回研究会（戒能座長による本研究会テーマ設定と今後の予定）
2016年3月 第2回研究会（研究発表：矢吹大吾さん、高井へら由紀）

III、研修会

- ・2015年9月4日
沖縄研修富坂リトリート（第2回共同研修会振り返りと展望）
- ・10月以降
今後の打ち合わせ：神谷牧師、三村運営委員、岡田総主事

IV、講演会

1. 日時：2015年4月17日（金）
会場：富坂キリスト教センター1号館
主題：「北東アジアの状況について語る」池明観先生を囲む会
講師：李泳采さん、池明観さん
2. 日時：2015年5月31日（日）
会場：富坂キリスト教センター1号館
主題：沖縄戦から70年～辺野古新基地建設問題と軍事主義
講師：安次嶺美代子さん（センター研究員）
3. 日時：2015年6月26日（金）
会場：富坂キリスト教センター1号館
主題：公開セミナー＜教会と社会を考える＞1
いま、宗教改革を生きる一耳を傾け共に歩むー出版記念『行き詰まりの先にあるものーディアコニアの現場からー』
講師：山本光一さん（前研究会座長・日本基督教団京葉中部教会牧師）
4. 日時：2015年11月6日（金）
会場：富坂キリスト教センター1号館
主題：公開セミナー＜教会と社会を考える＞2
いま、宗教改革を生きる一耳を傾け共に歩むー「日本の教会の社会への関わりの歴史」明治期プロテスタント史に遡って考える
講師：戒能信生さん（日本基督教団千代田教会牧師、元・日本基督教団史資料編纂室室長、農村伝道神学校・日本聖書神学校・東京バプテスト神学校講師）

5. 日時：2015年11月15日（日）
会場：富坂キリスト教センター1号館
主題：沖縄を拓く～戦後70年、女たちの活動と歩み
講師：山城紀子さん（センター研究員）

V、センター運営委員会

2015年4月、9月、2016年1月に開催。

「紀要」第6号発行のお知らせ

〈論文〉

- 脱原発社会と未来世代への責任研究会
新たな文化哲学へ向けて、シュペンゲラー以後—神学の究極課題としての原発問題……………安田治夫
原発と宗教と倫理……………河合弘之
宗教者として問う原発問題の深層 原爆・原発・再生可能エネルギー……………内藤新吾
 - 沖縄における性暴力と軍事主義研究会
日本軍の慰安所制度とたま子さん……………川田文子
天皇制と軍事主義—沖縄の『慰安婦』問題から考える……………山下明子
日本キリスト教協議会と「慰安婦」問題、そして沖縄との連帯—エキュメニカル運動は課題をどのように引き継げるのか……………大嶋果織
沖縄戦から70年 『辺野古新基地』問題と軍事主義……………安次嶺美代子
沖縄社会を拓く～戦後70年、女たちの活動と歩み～……………山城紀子
 - 戦中・戦後の日本の教会 戦争協力と抵抗の内面史を探る研究会
内面史研究の課題と方法について……………戒能信生
- 〈講演〉
- 第1回共同研修に参加して……………荒瀬牧彦
岐路に立つ沖縄—沖縄の歴史・文化・キリスト教—……………饒平名長秀
誰とともに立ち、折り、行動するのか……………村椿嘉信
日韓国交正常化50年 今我々に問われている真の市民連帯とは—民主化運動以降の民主化の時代を生きる者の視点から—……………李泳采
戦後70周年の東アジアについて……………池明観
行き詰まりの先にあるもの—ディアコニアの現場から—……………山本光一
日本の教会の社会への関わりの歴史—明治期プロテスタント史に遡って考える……………戒能信生
- 〈センター2015年度 事業報告〉

※2015年度に実施されたセンターでの研究発表などをおもに掲載しています。頒布価格は1冊1000円(送料込)です。

※昨年、故山岡よね子様（夫は故山岡喜久元センター理事・日本基督教団上富坂教会会員）のご遺族より、当センターに100万円のご寄附がありました。感謝してご報告申し上げます。沼澤悦子様はじめご遺族皆様の上に主の平安を心よりお祈り申し上げます。

編集後記

歴史、旅行、路面電車、酒…。〇〇暇なから少しでも現実逃避すべく、これらをキーワードに毎週撮り貯めたBS/地上波のドキュメンタリーやロケ番組を週末の早朝に飛ばし観。案外あちこちの土地・時代に行ったつもりになる。同じく正月から創世記の通読を始め、今士師記に停車中。頭の中はいつでも士師記の時代、しばらくこの状態。読んでいるだけでも神からの試練はなかなか大変。神を信頼せず裏切る民と、それでも愛をもって憐みをかけられる神のやり取り。自分もすっかりその民の一員のつもり。全く違和感ないから本当に困る。（金子）